

<qui est X?> の主語

藤田 康子

0. はじめに

「誰」・「どの人」であるかを問うフランス語の疑問詞 *qui* は、主語としても属詞としても用いられるが、<qui est NP?> は辞書や文法書で属詞の例としてあげられていることが多い (*TLF, GR, Le Goffic* (1993), 朝倉 (2002). 朝倉 (1981)) は *qui* が属詞であると明記している。また、東郷 (1994) でも *qui* は属詞位置の疑問詞としている。

一方、日本語のコピュラ文には「～は誰か」と「誰が～か」があり、後者は「誰が」が主格である可能性が高い。

本稿では *qui* が <qui est X?> ⁽¹⁾ の主語として用いられることがあるか、あるとすればどのような場合か、また制約があるかどうかについて考察する。その際、フランス語を母語とするインフォーマントによる調査を行い、*qui* が <qui est X?> の属詞として用いられるときと比べてどのような違いがあるのかを考察する。

なお、コピュラ文という用語は属詞に限定辞つきの名詞句をとるものに限定されることもあるが、本稿では原則的に属詞に形容詞または無冠詞名詞句をとるものも含めてコピュラ文と呼ぶことにする。*qui* を用いた疑問文は <qui est X?> と表記する。

1. 日本語のコピュラ文研究

日本語のコピュラ文は「A は B だ」と「A が B だ」という形式があるが、先行研究において、助詞「は」と「が」の対立から論じられていることが多い⁽²⁾。その中でも特に天野 (1998)、砂川 (2000) は「前提・焦点」, 「主題」という語用論的機能から名詞述語文の考察を行っている。一方、フランス語については、東郷 (2005) が話し手と聞き手の知識状態という語用論的要因から分析しているが、「前提・焦点」, 「主題」という観点に依拠したものではない。そこで、まず、日本語のコピュラ文分析に注目し、日本語のコピュラ文が語用論的・統語論的にどのような機能を持つのかを見よう。

天野 (1998) によれば、「は」文は主題表示機能を持つが、「が」文は持たない。さらに、「は」文は B の部分が焦点となる後項焦点文であるが、「が」文には A の部分が焦点となる前項焦点文、B の部分が焦点となる後項焦点文、文全体が焦点となる全体焦点文があるとし、「が」の一義的機能は格表示機能であり、焦点表示機能ではないとする。

砂川 (2000) は、「～が～だ」文の中には後項焦点文があるという天野の主張を否定し、「～は～だ」が後項焦点文であり、「～が～だ」は前項焦点文または全体焦点文であると述べている。また、主題については、「～は～だ」では前項が主題を提示し、「～が～だ」では主題がないわけではなく文中に明示されないという立場をとっている。

「が」には主題表示機能がないということは多くの先行研究に共通する見解であるが⁽³⁾、疑問詞「誰」には「は」ではなく「が」が用いられ、「誰は」ではなく「誰が」になることもこのことから説明できよう。また、「が」は格助詞性を欠き、専ら焦点表示機能に徹した用法があるという仮説に対し、天野は「が」が「焦点表示を行う頻度」が高いのは「主格表示機能を有する格助詞」であるためと予測し、「が」が主格を表示する可能性が高いと考えている。

これらのことから、日本語には「A は誰か」と「誰が B か」の2種類の形式があるが、焦点が「誰」とすると、前者は A を主題とする後項焦点文であり、後者は「誰」を主格とする前項焦点文である可能性があると考えられる。フランス語には <qui est X?> という1種類の形式しかないので、必ず前項

焦点文ということになる。では、X を主題とするとときと qui を主語とするときはあるのだろうか。

2. コピュラ文の主語の qui

2.1. *Le Bon Usage*

<qui est X?> の X が定名詞句のとき, qui が主語であるのか属詞であるのかは、形式からは判断ができない。qui が主語であることが明らかなのは、X が形容詞または無冠詞名詞のときである。このような例を収録している文献は少ないが、*Le Bon Usage* (p.540) にはいくつか見られる。属詞が女性形になることは稀であるという (2), (3)。

- (1) Après un tel, qui sera chancelier?
- (2) Qui est idiote? Ma sœur, ma mère, ma nièce?
- (3) Qui pouvait être plus glorieuse?

さらに, qui が複数形で用いられるのは être を用いた属詞をとる文であるとするが, qui が主語であるのか属詞であるのかという問題には触れていない。あげられた例はすべて定名詞句のものであり, 形容詞・無冠詞名詞の例はない。

- (4) Qui ont été nos guides?
- (5) Qui étaient mes prétendants?
- (6) Qui étaient nos ennemis, nos alliés?
- (7) Qui sont ces gens-là?

間接疑問文でも無強勢人称代名詞を除いて qui est NP? の語順となるため, qui が主語であるか属詞であるかを語順から判断することはできない。

- (8) Je ne saurais vous dire qui sont les plus vilains.

これらの例には先行文脈が示されていないので, どのような語用論的環境で用いられたのかもわからない。

2.2. *Blanche-Benveniste* と *Van Peteghem*

Blanche-Benveniste (1988) は *quel* についての論考であるが、その中で著者は名詞句の表す役割 *rôle* の値 *valeur* を問う疑問文では *qui* が主語であると述べている。しかし、あげられているのは *qui est le président {le vôtre / le meilleur / le plus malade}* のみであり、*qui* が主語であるとする論拠は示されていない。また、*qui* は単数であり、*qui sont les vôtres {les meilleurs / les plus malades / les hommes les plus hospitaliers}* は「不適切発話」とあるとし、発話例が1例も見つからなかったという。

Van Peteghem (1991) も *qui* が主語の例をあげている (p.111)。名詞句は単数形である。名詞句の表す人がどの人であるかを同定するときに *qui* が主語になるという。

(9) Qui est l'élève le plus intelligent? — L'élève le plus intelligent est celui-là.

(10) Qui est l'accusé?

(11) Et elle, qui était son père?

いずれの論考においても先行文脈は示されておらず、「前提・焦点」、「主題」といった語用論的な観点からの考察はなされていない。また、X は名詞句である。

qui が主語である論拠としては、Van Peteghem が (9) の返答部を強調構文 *c'est A qui est B* にすると、*celui-là* は A にくることができるが *l'élève le plus intelligent* はできないことをあげている。

(12) C'est celui-là qui est l'élève le plus intelligent.

(13) *C'est l'élève le plus intelligent qui est celui-là.

(9) の返答部の *L'élève le plus intelligent est celui-là* では *celui-là* が属詞であることには触れていない。

3. インフォーマント調査

フランス語は日本語と違い、主題表示機能をもつ「は」のような助詞も、格表示機能をもつ「が」のような助詞もない。また、文の構造も異なり、<qui est X?>

は主語と属詞を含む述語によって構成される。qui が主語であることが明白なのは、X が形容詞、無冠詞名詞句、不定名詞句のときである。X が定名詞句のときは、qui と X のどちらが主語であるかは形式からは判断できない。そこで、X が形容詞、無冠詞名詞句、不定名詞句、定名詞句の作例をインフォーマントに示した調査結果をもとに、qui が主語として用いられるか、属詞として用いられるかを考察しよう⁽⁴⁾。

3.1. qui est Adj / N?

<qui est X?> の X に形容詞または無冠詞名詞句が用いられるのは、たとえば Olivier est sincère の Olivier を聞き逃したというような状況であろう。インフォーマント調査ではこのような状況を設定した。

(14) は大勢のいるところで人称代名詞 elle が誰を指すのかがわからないため、聞きなおすという文脈である⁽⁵⁾。

(14) Dans une salle de banquet

A : Qu'elle est charmante!

B : a) Qui est charmante? {b)*Qui est charmant? / c)*Qui est la charmante?}

qui を主語として用いることにはまったく問題がない (14a)。女性であることが明らかな文脈では形容詞の女性形は適切だが、男性形は不適切であると判定される (14b)。Le Bon Usage のように女性形の使用は稀であると片付けてしまうことはできない。また、A の発話を受けて、属性 charmante を備えた女性を la charmante で表すことはできない (14c)。

しかし、定名詞句が用いられることもある。

(15) Deux femmes se disputent.

A : Vous êtes menteuse!

B : a) Qui est menteuse? {b) Qui est la menteuse?} Vous ou moi?

A の発話では冠詞はないのに、B の発話では定冠詞がある (15a)、ない (15b) とも問題がないと判定された。(15a) は単に鸚鵡返しの問いである。(15b) が適切と判定されるのは、A と B のうち誰であるかは別にして、嘘つきが 1 人存

在することには異論がなく、これを *la menteuse* で表しているからだと考えられる。*la menteuse* は変数であり、問いはその値を複数の選択肢 A, B のうちどれにするかを問題にしているのである。(15a) の *menteuse* は変数にはなりえず、(15b) のような複数の選択肢は B の念頭にない。

このことから、定名詞句が適切と判定されるのは、複数の選択肢から変数にあてはまる答えを探すなど、変数に対応する値がどれかを問題にするという文脈であることが伺える。(14c) **Qui est la charmante?* が不適切と判定されるのは、どの人であるかに異論があるなどのこうした文脈ではないからだと考えられる。(14a) *Qui est charmante?* は変数にどの値を付与するかを問題にしているのではないため、適切と判定される⁶⁾。

さらに、適切と判定された (15b) の返答についてたずねた。

(15) B: b) *Qui est la menteuse?*

A: d) ?*Vous êtes la menteuse.* {e) *La menteuse, c'est vous.* /

f) *C'est vous qui êtes la menteuse.*} *Pas moi!*

(15e), (15f) が適切と判定された。(15f) は文法書等で主語を強調すると説明される強調構文であり、確かに動詞は *vous* に対応する活用形になる。この点に基づけば、*vous* が主語ということになり、したがって *vous* に対応する *qui* が主語ということになる。しかし、(15e) では *vous* は主語ではない。さらに、*vous* を主語にした (15d) は *vous* にアクセントを置いても容認度が落ちる。このことから、(15f) は (15b) の *qui* が主語であるという根拠にはならないといえよう。2.2. で見た Van Peteghem の論拠は成立しない⁷⁾。むしろ (15b) では、A の発話を受けて用いられていることから、変数 *la menteuse* が主題として機能している可能性がある。また、文の意味からしても、変数が主語で値を問う疑問詞が属詞であると考えのほうが自然であろう。反対に *qui* が主語ならば、*la menteuse* は属詞ということになるが、この文脈では *la menteuse* という属性は考えにくい。したがって *qui* は属詞であると考えられる。

3.2. *qui sont Adj / N?*

2.2. で見たように, Blanche-Benveniste は *qui* が主語のとき, 複数の例はなかったと述べていた. 形容詞または無冠詞名詞句を複数形にしてみよう.

(16) Chez un couple millionnaire qui n'offre que de l'eau à ses invités.

A : Vous êtes radins, tous les deux.

B : a) Qui est radin? {b) *Qui sont radins? / c) ?Qui sont les radins?} Nous?

(16a) は変数となる名詞句はない. 変数にどの値を対応させるかを問題にしているのではないので, A が話題にしているすでに確定した人が誰であるかをたずねるときにも支障がない. (14a), (15a) と同じである. また, *radin* という属性を備えた人ならば誰でも答えになりえる. 複数の人に該当してもよく, わざわざ (16b) のように複数形にする必要はない. (16c) は *les radins* が変数として機能する. 変数に値「私たち」を付与することに疑問を呈しているとき, けちな人などここにはいないと値の存在を否定するときなど, 変数にどの値を対応させるかを問題にする文脈が必要になるという.

次の例でも (17b) は不可となる.

(17) Une écolière parle à sa maîtresse.

A : Aujourd'hui, Agnès, Jacques, Dominique et Georges sont absents.

B : a) Qui est absent? {b) *Qui sont absents? / c) Qui sont les absents?} Tu peux répéter?

(17a) のように単数形であっても, 複数の人に該当してもかまわない. *qui* 自体には答えを単数または複数に限定する機能はない. 一方, 変数に対応する値を探するときには単数が複数かは先行文脈においてあらかじめ判明している. (17c) は A の発話を受けて複数の欠席者が存在することを認め, これを *les absents* で変数として示し, 対応する値を求めている.

なお, (17c) に対応する答えとして(17d) は適切とは判定されなかった.

A : d) *Agnès, Jacques, Dominique et Georges sont les absents.

e) Les absents sont Agnès, Jacques, Dominique et Georges.

f) Les absents, ce sont Agnès, Jacques, Dominique et Georges.

les absents が主題として機能している (17e), (17f) は適切と判定された。このことから (17c) の les absents も主題として機能している可能性が高いと考えることができる。変数に値を対応させるのが文の主旨であるから、変数を主語にするほうが自然である。qui は属詞ということになる。

3.3. qui est un N? / qui sont des N?

フランス語では不定名詞句が主語にならないわけではないが、ここで取り上げる <qui est X?> は qui が主語であることが明らかなものである。

(18) Au bureau

A : Mon directeur est un vrai démon.

B : a) Qui est un vrai démon? {b) *Qui est le vrai démon?}

単なる聞き逃しによる問いである。変数に対応する値を誰にするかを問題にする文脈ではないので (18b) は不可となる。X が不定名詞句のときも、X が形容詞・無冠詞名詞句のときと同じ原理が働いていると考えられる。

ところが、不定冠詞複数を用いた例では、容認度がやや下がるものの、適切と判定されたものがあつた (19b)。

(19) Une interview

A : Vous êtes de jeunes actrices douées.

B : a) *Qui est une jeune actrice douée? {b) Qui sont de jeunes actrices douées? / c) ?Qui sont les jeunes actrices douées? / d) De jeunes actrices douées? Vous parlez de qui?} Nous sommes jeunes et actrices, nous faisons des efforts, mais nous ne sommes pas si douées!

qui が複数形動詞の主語になりえるということになる。これは、(19a) のように単数形にすると、une によって該当者は1人であるという限定が強く働いてしまうためではないか。まったく問題ないと判定されたのは (19d) であり、qui を複数形主語として用いることに抵抗がないわけではないようである。(19c) は (16c) のような特殊な文脈が必要と判定された。

(20) A la fac

A : Je cherche un bon animateur pour le symposium. Vous avez une idée?

B : Un bon animateur... a) Qui est un bon animateur...? {b)*Qui est le bon animateur...?} Ah, ça y est, c'est Georges!

適切と判定されたのは (20a) である。A の発話時点において A の脳裏にも un bon animateur に該当する人は浮かんでいない。B の問いの un bon animateur にも存在前提はない。その答えには、特定の人が想定されているのではない。答えは何通りもありえるが 1 つ挙げればよく、すべて挙げる必要もない。複数の人が該当してもかまわない。任意に選ぶことができるのである。(20b) は変数が単数であることから、正しい答えは 1 人しかいないということになる。また、それは任意の 1 人ではなく、A の脳裏にあるはずの 1 人であり、一意的に決らなければならない。この文脈では不適切と判定される。

3.4. qui est le N? / qui sont les N?

X が定名詞句のとき、qui が主語か属詞かは一見ただけではわからない。

(21) B connaît Jacques.

A : Vous connaissez Jacques? Il est mon voisin depuis une semaine.

B : Pardon? Qui est votre voisin, vous avez dit?

聞き逃しによる問いであり、qui が主語の可能性がある。このとき属詞 votre voisin は変数ではなく、属性を表す。一方、定名詞句が変数として機能し、値がどれかが問題になっているとすると、qui が属詞だと考えることができる。qui は主語と属詞の両方の可能性がある。

(22) A : Vous savez, Agnès et Jacques sont mes voisins depuis une semaine.

B : a) Pardon? Qui sont vos voisins? Je n'ai pas entendu.

X が複数形るとき、B は該当者が複数あることを知っていなければならない。

X は変数であり、値は一意的に決る。変数に対する値を問うので変数の方が主

語であり、値を問う *qui* は属詞であると考えられる。ところが、B の問いは X が単数形でも容認できると判定したインフォーマントがいた。

(22) B: b) Pardon? Qui est votre voisin? Je n'ai pas entendu.

X が変数であるとする、話者は該当者が 1 人しかいないと想定しているという事になってしまう。そうではないなら、X は変数ではなく、属性を表していると考えられる。*qui* には何人が当てはまってもよく、複数の人に該当してもよい。(17a) と同じ原理が働いている。*qui* は主語であると考えられる。

(23) Aux enfants qui font du judo

A: Qui sont parmi vous les plus forts?

B: Ce sont Clément et Mikaël.

Blanche-Benveniste はこのような変数に対する値を求める問いは *qui* が主語であるとし、複数形では例が見られなかったと述べていたが、*qui* が主語であるかどうかは別とし、複数形でも問題ないことがわかる。この例では反対に単数形 *qui est parmi vous le plus fort?* では該当者が 1 人になり、問いの主旨が異なってしまう。まず、*qui* が主語であるとする、「一番強い」という属性を備えた者は 1 人しかいないという前提になるので、*qui* には 1 人しか該当しないことになってしまう。また、*qui* が属詞であるとする、変数「一番強い者」に対応する値を求めていることになり、やはり値は 1 人しかなくなってしまう。名詞句を複数形にすることで、変数「最も強い者たち」に対応する値を求めることができるのである。値は一意的に決り、この文脈に適合する。*qui* は変数に対応する値を求めているので、属詞であると考えられる。

4. おわりに

<qui est X?> の X が単数のときは *qui* は主語・属詞の両方があり、X が複数のときは属詞であるというのが本稿の結論である。

qui が主語のとき、X は属詞である。属詞の表す属性にあてはまるのであれば、誰であっても答えになりえる。(20a) の示すように、答えは何通りもあり

えるが、1つ挙げればよく、すべて挙げる必要はない。任意の答えでよい。その他の例、たとえば (14a) *Qui est charmante?* では答えは *elle* に対応する人が付与されるはずであり、任意の答えではないが、これは語用論的な配慮から、回答者が Grice の「会話の格率」に則って求められた答えをしているだけであり、<qui est X?> 自体に答えの人数を限定する機能はないと考えられる。答えに複数の人を期待しているときでも単数形で問えばよいので、原則的に複数形にはならない。

qui が属詞のときは、*X* が主語である。*X* は変数を表し、*qui* は対応する値を問う。答えには変数に該当するすべての値を列挙しなければならない。答えは1通りしかない一意的なものである。したがって、*X* は答えに1つの値を期待するときは単数形、複数の値を期待するときは複数形が用いられる。

X が形容詞・無冠詞名詞句・不定名詞句のときは *qui* が主語である。このような発話は、*X* が単数形であるとき、問題なく容認される。*X* が定名詞句のときは、*qui* は主語のときと属詞のときの両方がある。*qui* が主語のとき、*X* は単数形である。*qui* が属詞のとき、*X* は単数形・複数形の両方がある。*X* が単数形のとき、*qui* が主語か属詞かは文脈に即して問いの主旨から判断される。

以上の結論はインフォーマント調査の結果に基づいたものであり、仮説の域を出ていない。特に *X* が定名詞句の場合については、*qui* が主語か属詞かの結論を出すには、発話例を分析し、談話の中で主題として機能しているかどうかを統計的に観察するなどの研究を重ねる必要がある。今後の課題としたい。

注

- (1) 本稿では複数形 <qui sont X?> も取り上げるが、ここでは <qui est X?> で代表させる。
- (2) 日本語のコピュラ文研究については天野 (1998)、砂川 (2000) 参照。
- (3) 天野 (1998) 参照。
- (4) インフォーマントは4人。
- (5) 作例中の「*」は当該の文脈では不適切で容認できないと判定されたことを示す。
- (6) (14a), (15a) のような疑問文は指定文の疑問形ではないということになる。指定文

の定義については Declerck (1983) 参照.

- (7) (15e) *La menteuse, c'est vous.* は *ce* を取って **La menteuse est vous.* とすると非文になる. (15d) *?Vous êtes la menteuse.* とともに, <NP est NP> はいずれも問題があり, (15e), (15f) *C'est vous qui êtes la menteuse.* のように *ce* を介すると適切になる. このことは, <c'est A qui B> は, A と B が直接には主語・属詞の関係にはないこと, 主語を強調するとは一概に言えないということを示しているのではないか. むしろ, 焦点 A を強調する文であるといえよう. 文法書等で属詞の強調に用いられるとされる <c'est A que B> は, 構文自体が用いられないと判定されることから, 主語であれ, 属詞であれ, 焦点を明示する構文として <c'est A qui B> が用いられ, 動詞は *qui* の前の語句に一致させるという伝統文法的な統語規則が守られているだけだと考える余地もあると思われる.

参考文献

- 朝倉季雄 (1981): 『フランス文法ノート』, 白水社.
- 朝倉季雄 (2002): 『新フランス文法事典』, 白水社.
- 天野みどり (1998): 『前提・焦点』構造からみた『は』と『が』の機能, 『日本語学』3, 67-84.
- Blanche-Benveniste, C. (1988): «Eléments pour une analyse du mot *quel* », A. Chervel et M. Gross (eds), *Hommage à Jean Stéfanini*, Université de Provence, 59-75.
- Declerck, R. (1983): « 'It is Mr. Y' or 'He is Mr. Y' », *Lingua* 59, 209-246.
- Grevisse, M. (1975): *Le Bon Usage*, Duculot.
- Le Goffic, P. (1993): *Grammaire de la Phrase Française*, Hachette.
- 砂川有里子 (2000): 「文の構造と談話機能—日本語のコピュラ文分析」, 『東アジア言語文化の総合的研究』(筑波大学学内プロジェクト), 38-74.
- 東郷雄二 (1994): 「メタ形式としての『とは』とフランス語の属詞を問う疑問文」, 関西フランス語学会発表原稿.
- 東郷雄二 (2005): 「名詞句の指示とコピュラ文の意味機能」, 『指示と照応に関する語用論的研究』, 文部科学省科学研究費成果報告書.
- Van Peteghem, M. (1991): *Les phrases copulatives dans les langues romanes*, Gottfried egent verlag.

(文学部非常勤講師)